

楊威理著 『ある台湾知識人の悲劇』

詹 秀 娟

はじめに

『ある台湾知識人の悲劇』は1993年2月に著者である楊威理（日本名・中日威博）氏が親友の葉盛吉（日本名・葉山達雄）氏の遺稿に基づいて著した伝記である。葉氏と楊氏は共に日本の植民地台湾で生まれ、第二次世界大戦の終りまで日本の教育を受けた。葉氏は台湾で中学校を卒業した後、1943年（昭和18年）4月に仙台の旧制第二高等学校に入学した。そこで同級、同寮の楊氏と知り合うことになるが、互いに台湾が同郷であったことから入学半年後には親友となった。

葉氏は台湾の白色テロ時代の1950年に、蒋介石国民党の「赤狩り」により27歳の若さで銃殺刑に処された。彼と共に銃殺された14人の台湾青年は医師、教員など何れも台湾の知識人であった。一方、楊氏は台湾から中国大陆に赴き、そこで生き抜いてきた。楊氏が葉氏の死を耳にしたのは死後30年もたった1980年であった。この作品は、葉氏が二高時代からずっと付けてきた日記や手記、自叙伝など25冊の資料をもとに1991年来日以降、楊氏が書いたものである。

葉盛吉氏は新婚5ヶ月で逮捕され、その5ヶ月後に長男が生まれた。長男誕生後2ヶ月も経たないうちに葉氏は銃刑された。遺児の葉光毅氏は父親の日本語の日記と手記を読むために日本語を勉強し、1975年から1983年まで大阪大学に留学し、帰国後、台南の国立成功大学の教授となった。未亡人の葉夫人と葉光毅氏は、葉氏が残した日記や手記などの資料を家宝として保存してきた。著者が言うように、白色テロの時代にそのような資料を手元に置いておくのは余程の勇気が要り、夫人の執念には頭が下がる思いである。まして、国民党政府の特務（日本の特高に相当）がわざと郭家（葉氏の奥さんの実家）の向かいに住み込んで、長年郭家を監視していた状況においてであれば、なおさらである。

一方の楊威理氏は1989年の天安門事件発生の一週間後、43年間住んだ中国大陆からイギリスに渡り、ロンドン在住のご息女の居所で一時滞在していた。中国の文化大革命を身を以て経験したことから中国の動乱に危機を感じ、1991年にロンドンから東京に移住してきたのである。

この作品で楊氏は、葉氏が日記の中で書いている二人が共に過ごした仙台の旧制第二高等学校での内地留学の生活、終戦前後の日本の社会状況、戦後の台湾の変化を回顧しながら、楊氏の私見と解釈も含めて、植民地時代の台湾人の苦悩、中国と日本、台湾と中国大陸本土という二つの祖国と二つの故郷の間に引き裂かれて悩み続けた葉氏の実話の生涯を感動的に描いている。この作品は著者の言うように、葉氏の短い一生に日中両国の現代史の側面を見ることができる。また戦後の国共両党闘争史をも垣間見ることができる。著者の楊氏自身も劇的な半生を送った。中国の文化大革命に巻き込まれ、中国社会の動乱の歴史の中で生き抜いてきた波乱万丈の人生経験そのものが中国の近現代史の証言であり、この作品における主人公の葉氏と著者の二人の生き方は、植民地時代の台湾と戦後の台湾の歴史を理解するのに大いに役立つ。

著者の楊威理氏こと中目威博氏は新潟産業大学人文学部設立の1994年に本学に迎えられ、2008年に名誉教授を授与された。筆者は4年間、彼とご一緒させていただいた。筆者も中目氏と同じ台湾の同郷であり、歴史に翻弄され波瀾万丈の人生を歩んだ中目氏を大先輩として仰いでいる。今回の人文学部紀要の最終号にあたり、本作品の『ある台湾知識人の悲劇』を紹介し、著者楊威理氏について解説し、主人公の葉盛吉が残した日記を紐解くことを通じ、日本の植民地時代から蒋介石政権の中華民国へ歩み出す台湾の歴史を辿ってみたい。

1. 葉盛吉の生い立ち

葉盛吉は1923年（大正12年）台湾台北で生まれた。彼は閩南系（閩南は南福建のこと）の台湾人、即ち明、清の時代に中国大陸から台湾に移住してきた漢民族の子孫である。葉盛吉は子供のなかった叔父・葉聡に貰われて、育てられた。葉家は大家族で祖父の時代は台南県新営郡塩水の名門であった。祖父が建てた「八角楼」の庭先にある大きな石碑には「伏見宮貞愛親王 御遺跡 塩水港御舎営所」と刻まれている。親王は日清戦争終了後近衛師団を統帥し、この近辺まで来たときに「八角楼」に泊まったと記されている。石碑の裏には「明治二十八年十月自十二日至十八日 御舎営 昭和十八年三月三十日建立」の字が見える。この八つの角を持っている珍しい建物が塩水の名物になり、葉家の当時の隆昌を覗うことができる。

葉盛吉の父となった葉聡は植民地統治の第二世代の台湾人であり、台北師範を卒業した。かなりの日本の教育を受けてきたことから、20歳から新営塩水港製糖株式会社本社に勤め、65歳まで人事課に勤務し課長にまでなったという。当時の植民地の台湾で人事

の仕事に任されていたことは会社に相当信用されていたに違いない。日本人が経営している製糖会社の社宅に住んでいたため、葉盛吉は幼いころから日本風の環境の中で育て上げられた。葉氏の昭和18年9月22日の手記では、正月になると《晴れ着を着て、美しく門松たてて、日の丸の旗たなびく社宅の通りは何となく明るい感じ》で、一方では《砂糖をころがした落花糖、冬瓜の砂糖漬、……爆竹の音、田舎に行けば門ごとに見られる赤い対聯[対句]を書いた掛軸》と回想している。幼い葉盛吉の正月には、日本的なものもあれば、台湾的なものもあったのである。旧制二高に入って間もなく、葉氏は昭和18年9月12日の手記に次のように回顧している。

《自分の心には一つの故郷がある。社宅に幼時を過ごし、中学校で寮生活をやった自分は、教科書の上からと共に知り得た内地〔日本〕の風俗習慣が、そこに一つの故郷を植えた。幼いころ、暗いじめじめした建物、親類の家に結婚やら、葬式などで行き、その生活、その行事に接したり、或は田舎の廟の祭りの光景、人の山、物売り、騒がしい芝居、仮装行列、花車等を見た幼き日の印象が、更に一つの故郷を心の中につくって来た。前者は社会の生活から、後者は血統、伝統から来た故郷である。それがさほど矛盾を感じることなく、自分の心の中に存在していることは全く不可思議と言うほかはない。》

幼年時代の葉盛吉には、既に二つの故郷があったのである。このような日台混合の幼年時代は、葉盛吉の一生に大きな影響を与えた。

台南一中時代の葉盛吉は台湾出身でありながら、日本的な優秀な中学生であった。中学卒業時、成績第一番には北白川宮殿下奨学資金賞を授与されたが、葉は二番目の台南州知事記念賞を授与されている。卒業式に、葉は旧制六高の受験のため岡山に行っていたため参加できなかったため、父親が代わりに出席したが、知事賞やら精勤賞やらを沢山もらって、あまり賞品が多いので、新宮駅から社宅まで人力車を雇い、家に着いてから子供のように狂喜したという。

台湾人と日本人の生活習慣などの違いにより日本人が優越意識を誇っていたことから、葉も日本人から差別を受けたこともあったが、中学5年生の時の日記に《振り返り見ますれば、昭和十五年は実に我が輝く皇紀二千六百年に当たり、誇りと感激とを以て終始した一年だった。》と記している。台湾での中学の5年間は日中戦争の最中で、彼の思想は日本的であった。

この日本人との対立と二重生活の矛盾を葉盛吉は自叙伝に次のように述べている。

《私の中学生生活の大半は中日事変の最中であつた。それは生活の上のみならず、思想の上にもいろんな影響を印した。日本人との対立、二重生活の矛盾は、私を駆って民族意識に目覚めさせたというよりは、むしろ、それからの逃避という型を取つた。私が民族意識を強く持つに至つたのは日本に行つてからであつた》

葉は自ら良き日本人になるよう努力した。台湾人が日本人になれば同一民族となり、民族問題は自然と解消してしまう。葉は5年間の中学生生活で、日本の同化政策に沿つて前進したのである。昭和18年9月12日の手記には次のように述べている。

《自分は中学時代、すべてに対して忠実であつた。されば、内地人の友の家を訪うて、その生活に憧れたことはあつても、大して悩みはなかつた。同化ということを感じてゐた。やがて我々も彼らと同じレベルに達し得る日が来ることを夢見てゐた。少なくとも自分は必ず実現する希望に輝いてゐた》

葉氏はわりと素直に日本の皇民化教育を受け入れたのであつた。筆者は、葉氏が台湾は皇民化によって、自分も台湾も日本と同じく文明なレベルに達することができると信じ、一生懸命に日本人にならうと努力してゐたのだと考える。また彼は日本を愛し、ふるさと台湾も愛し、二つの故郷が同じレベルの一つになることを心のどこかに潜ませてゐたのではないだろうか。これも葉盛吉の心のふるさと台湾に期待してゐたと言えるのであろう。昭和14年の中学4年の夏に日本へ修学旅行に行つたきっかけもあつて、中学校を卒業した後、昭和16年の2月に大望を抱いて台湾の基隆港から憧れの日本へ出港し、日本での内地留學生生活が始まつたのである。

2. 二高での葉山達雄

日本政府は「皇民化」の一策として、昭和15年に改姓名規則を公布した。当時、この規則に反対した日本人もいた。祖先から頂いた貴い日本の姓名を台湾人に与えるとは何ごとだ、と言うものであつた。一方の台湾人にも強烈な反対があつた。祖先から受け継いでゐる貴い姓名を捨てるとは「背祖」（親不孝者）である、と言うものであつた。この制度は半強制的に実施され、改姓しなくても命に関わることはなかつたが、改姓した方が何かと有利であつた。葉盛吉は昭和16年9月15日に台湾の父から「改姓名許可通知あり」との便りを貰つた。葉山達雄という日本名で姓名変更届を出したのだ。しかし、

日本名へ改姓するこの時期に、葉は民族意識が目覚めてきたのである。自叙伝には次のように書かれている。

《このころ、[昭和十六年の秋]、私は台湾の学生の最も多く住んでいる高円寺に住んでいたが、そこで偶然の機会に、中国の一留学生から民族意識を鼓吹された。その印象は深刻で、ために一時、高校の文系を受けようという気になった。民族意識の目覚めの出発であった。その日から私の心中の葛藤は止まなかった》

この事は葉氏にとっては衝撃的であった。従来の信念を否定するものであって、良き日本人になるようにあれだけ努力してきたのにそれは間違っていたのか。俺は日本人なのか、中国人なのか、葉は苦悩の奈落に突き落とされたという。この時期の現実的な問題が受験にあったこともあり、葉のこの民族問題は浪人時代には心の底に秘されていた。このことは著者の楊氏の解説によると、「彼は中学時代を回顧して、慙愧の念に打たれている。あの時期は一途に同化の道をたどり、日本的なものだけに心を引かれて、台湾的なものを無視していた。この道は誤りであることに気づいた。」と。

葉氏は終戦後、祖国台湾を愛する志を抱いて台湾に帰国する道を選び、そして、27歳で蒋介石の台湾での「赤狩り」で銃刑されたが、日本留学中に目覚めた民族意識がその後の彼をそのように運命付けたと思わざるを得ない。

葉氏は2年間の東京での浪人生活を経て1943年（昭和18年）の春、仙台の旧制二高の理科乙類に合格した。理乙は卒業後に帝国大学の医学部に入る者が大多数を占めていた。植民地台湾の知識人には医学の道を選んだ人が多かったが、それは文系を出て官僚になっても植民地人には出世の道が開けていなかったからである。医者になり開業すれば、一生暮らしていけると思われた。

葉盛吉は日本名の葉山達雄で日本人として二高で活躍し、青春時代の学生生活を送った。昭和18年、二高1年生の10月に明善寮一寮の庶務幹事に選ばれ、庶務委員から総務委員になり、一寮の仕事を総轄することになった。翌19年の1月に明善寮弁論大会で1等に入賞したことで、全寮の注目を浴び、選挙で次年度の全明善寮の前期幹事に高い得票で選ばれた。二高での勉学生活はわずか2年であったが、葉氏の人格形成に大きな影響を与えた。後に彼の人生観や政治・思想の芽生えの原点になったと言えるであろう。

著者によると、明善寮での昭和18年前後、葉氏の考え方は「良き台湾人」になるには、日本の大東亜戦争に協力しなければならないというものであった。これは「良き日本人」と同時に「良き台湾人」になりたいという思想、すなわち両方を融合する「両立の思想」であり、葉氏は「八紘一宇」の大理想の神髄は民族と民族の愛、即ち人類愛であると受

け止めていた。

明善寮の幹事の重任を引き受ける決心を下した葉氏の昭和19年2月6日の手記には次のように記されている。

《二道がやがては一道に合する。これが信念であり、信仰である域まで、心を持って行けるように努めよう。そうすれば俺個人の人生観、国家観、世界観というものが一となるであろう。目標を求めること既に久し。今にして曙光を見たように感じられる》

昭和18年9月12日の手記には《戦地に行きたい。本当に自分はそう思った。戦死しても本望である》とあり、さらに昭和19年1月3日の手記には《現下の情勢は、我々の心を駆って雄大、壮大の戦場に向かわしめる》と書いている。

著者の解説によると、当時、出陣した学徒の心境はさまざまであるが、葉氏の胸中には国家と運命を共にするという真摯にして、また熱烈なる気持ちが溢れていた。「良き日本人」になりたいという葉氏の一面がここにはっきり現れている。

昭和19年の前半に、国粹主義とユダヤ研の影響を受け、葉氏の思想は右に傾いた。明善寮全寮の弁論大会での弁論内容には国粹主義の言論が多く含まれていた。葉氏は昭和19年2月21日の手記に《日本精神は偏狭なものではない。それが八紘一宇の精神だ。一切を包容する》と書いている。葉氏は明善寮の幹事として、寮生活をこう記述する。

《幹事は日本人、それも本当に臣民に徹しなくてはならぬ。何かせねばならぬ。沈滞している。そういう感じが、絶えず圧迫感として迫ってくる。日本人たることの難しさを感じず。明善寮生は日本人である。これを除いては寮生活とはいえない》

(昭和19年4月7日の手記)

葉氏は二高の中国人留学生をも日本人にしようとしていたという。

仙台旧制二高での葉盛吉は民族問題の苦悩を抱えながらも、懸命に日本人になろうと努力していたことが伺える。しかし、著者によると、昭和18年頃から、軍事訓練を強化するため、国分五郎大尉が二高に派遣されてきた。葉氏の手記では、この大尉が昭和18年の晩春と昭和19年の5月初旬に葉氏を侮辱した、とある。一体、国分が何を言ったのか、彼の日記にも、手記にも一言も触れられていない。書くに忍びないほどの侮辱的な言葉であったに違いないという。5月12日の葉氏の手記には《国分の余にたいする言は

全く言語道断。幾多の人々のために、かかる性格の人間は抹殺する必要あり》《俺はこれから無口になろう。でしゃばらないようにしよう。俺に何の資格がある。人にものを言うに値しようか。一年生を導くということに至っては笑止の至りだ。すべてに対して熱を持つまい。……俺が二高を思い、日本を思う衷情、果たして曲解せられずに済むか。……寮の事務はもちろんやってやる。しかし、この範囲は超すまい（頭ががんがんなる。夕方、図書室にて）》(手記、昭和19年5月12日)。国分が葉氏に与えたショックは大きかった。彼は昔の葉盛吉に戻ろうとした。

3. 中目威博氏との出会い

中目威博は著者楊威理の日本名である。楊氏は1925年（大正14年）台湾の淡水で生まれた。台北の小学校で勉強していたが、父親が満鉄に転勤したため、大連に連れて行かれた。両親共に台湾人であるが、父親は1934年（昭和9年）に石巻の中目家の養子となり、戸籍を台湾から日本に移し、日本人になった。彼は葉盛吉と同じく医学を学ぶために、旧制二高の理乙に入った。二高では日本人で通し、自分の台湾籍を口にせず、日本人の父、台湾人の母のハーフと思われていた。葉氏とは同じクラスで、寮も一緒であった。楊氏の父親が旧満州のチチハル鉄道局に勤務し、楊氏が大連三中の出身であったことから、葉氏は、中目を旧満州から来た日本人学生と思っていた。同じ同郷の台湾人であること分かったのは入学して半年ほどしてからである。

葉氏は昭和18年11月11日の手記に楊氏との出会いを次のように記している。

《異郷で同じ血を引く同郷の者に会うことは、限りなく力強く、嬉しいことである。入寮後、間もないころ、家が満州のチチハルという所にある中目という人が、隣りの一室にいた。素性も良く知らないから、大して語り合うところなかったが、たまたまグライダーの訓練の帰り、語り合う機会を得て、彼の母が台湾の台北の人で、彼の母は死ぬ。小学校5年のころまで、台北にいて、彼の父は本籍が石巻にあることを知った。その後、自分は彼と石巻に遊んだり、共に「寺廟神の昇天」について論じたりして、台湾の問題につき語るところがあったが、それは混血児たる彼を飽くまで台湾に関する心からなる理解者位に思っていたことであって、お互いが同郷者であるという点に発するものではなかった。》

一方、著者の楊氏は葉氏との交友を次のように記述している。

「二人は夜の明けるをも知らずに、人生を語り、天下国家を論じ、国を憂えては痛飲し、

友の恋物語を聴くに時間をも惜しまなかった。もちろん、我々が語ったのは主に政治と思想であった。被支配民族の知識人として、二人は同じ悩みを持っていた。

同化の問題、植民地文化の問題、天皇制の問題、帝国主義侵略の問題、ユダヤ問題、神道の問題、共産主義の問題、日本の敗戦、中国の将来、寮生活、女性問題など、何一つとして語らざるものはなかった。」という。

さらに、葉氏の日記では

《中目と話を共にすると必ず論争となる》(手記、昭和19年5月22日)

《中目と小生、大激論、ぐるぐる回転してきりなし》(日記、昭和18年8月15日)

葉氏の自叙伝では

《二高の生活に忘れられない人が二人いる。一人は日本人の鈴木〔英世〕というチビで、それでいて、良く文学を読み、人生に悩む清水の人と、中目(楊)という台湾の者。後者はその後ずっと台湾に帰るまで交友を続け、肝胆相照らす仲で、私の思想にもっとも影響するところが多かった》と述べている。

楊氏も「私の学生時代に私の思想にもっとも影響するところが多かったのは葉盛吉であった」と回想している。

さらに、葉氏は中目のことを昭和19年1月4日の手記に次のように書いている。

《中目は俺にとっては良き相手だ。彼は個人の弱さがある。しかし、彼は相当本を読んでいるし、見る所もなかなか鋭い。彼とぶつかる所が多くあるが、その度に何か得るのである。俺は体験より割り出した議論をもってすれば、彼は読書によって得たところをもって俺に向かう。なかなか鋭い。俺は彼との衝突が、俺を常に高きに引き上げて行くように感ずる。自分の言うことを他人が感心して聞いてくれ、そして、自分はそれで満足しているようでは、何時までたっても進歩はない。常に自分を強く打ち叩く者のいることは有り難いことである。自分の意見と反対の意見のあることを希望す。にっちもさっちもならぬまで叩きのめされなくてはならぬ》

著者は葉氏との論争の一節を著書の中にも記述している。昭和19年の春休み、楊氏は旧満州のチチハルに帰省した。楊氏は日本と満州の各地を回るにつれて、いろいろなものが目に入ってきて、海外の満州から見ると、日本の姿がいやでもはっきりしてくる。仙台に帰ってから、それを葉氏に語ったが見解の相違はまたも猛烈な論争となった。

5月21日に、台湾籍の二高生が台湾人新生の歓迎コンパを開いたが、その歓迎会で

も二人は鎬を削る大論争をした。

《論、中日とぶつかっては激しい議論となり、一年生を唾然とさせた》(日記、5月21日)

この論争の根源は、楊氏が、満州の、ひいては大東亜各地の悲惨な現状は、日本が責任を持つべきだ、ここに征服と被征服、原因と結果がある、と主張したことにある。葉氏は、これは表面的見方だ、本質的問題を知らざるものだ、と反論した。楊氏は現状を素直に見よ、と反発したが、葉氏は東亜各民族の苦しみは認めるが、もう一歩深く観察しなければならぬ、と言い張った。現状はあたかも日本によって起こされたがごとくに見えるが、実は宗教的根柢がある、と葉氏は主張する。この「宗教的根柢」とはほかでもない。二高のドイツ語の教授・小野浩たちのいうユダヤ教なのであった。

この論争については昭和19年5月22日の葉氏の手記では次のように記述されている。

《中目と話を共にすると必ず論争となる。彼は現状、なかんずく、彼が今度満州に帰省してより、現状に対しては黙認し得ずと言う。俺はこれに対して、あくまで本質的な問題を主張した。すなわち、現在の状態は百も承知だが、現状はあくまで現状にして、それに執している間は、皮相的な見解になる恐れ十分にあり。本質的な問題を知らざるが故に、ただ単に表面のみより判断し、処置せんとするは幾多の錯誤を起こす危険あり》

二人の論争は激しいものであった。双方とも自説を覆さず、ついに8月8日の日記に《帰り、中目に会い、シロップを飲み、後、寮までずっと話すが、結局、彼と俺との間には大きな溝が生じた》と述べている。

昭和19年8月16日より昭和20年3月3日の卒業前まで、徴兵猶予になっていた二高の理科生は軍需工場へ勤労奉仕に行かされた。行く先は宮城県南部の柴田郡船岡町の軍需工場「第一海軍火薬廠」だ。学生は全員、工場内の宿舎に泊まった。宿舎名は地名を取って荻野二高寮と呼ばれていた。船岡に行ったのは理科の4クラスで、総員150名余り、葉氏は勤労隊長であったという。

船岡に行く前後から、葉氏は「中国語を勉強したい」と言い出した。旧満州に7年間住んだことがある楊氏は葉氏の中国語の先生になった。葉氏が中国語を勉強したかったことについて、中国語を外国語として学びたいのではなく、中国にアイデンティティを見出したいという彼の欲望からではなかったか、と楊氏は解説する。船岡に着いてから4日目にはもう勉強が始まった。船岡の工場で毎日寝起きを一緒にしているので、半年で葉氏の中国語は相当進歩した。日記には中国語が出てくるようになった。さらに葉氏は何年も喋っていない故郷の台湾語も復習し始めた。『台湾語辞典』、『日台会話大全』

も苦労して手に入れたのである。

葉氏はこの頃、中国に関心を持つようになり、楊氏に中国の国歌、すなわち中国国民党党歌を教わったのである。(注：ここでの「中国」は1911年に建国の中華民国を指す)中国関係の書籍に接し、初めて『三民主義解説』の本を読んだ。葉氏と楊氏の二人の友情は政治理念で相違があったが、お互いに固い信念を持ち、強い絆で結ばれていた。楊氏が初恋を打ち明け、葉氏の実らぬ恋や、互いが相談相手になる間柄の友情であった。しかし、その時の葉氏はまだ中国の土を踏んだことはなかったもので、中国と台湾に対する見方も異なっていた。楊氏は中国から台湾を見ていたのに対し、葉氏は台湾から中国を見ていたのではなかろうか。

4. 終戦後の日本での二人

葉盛吉は昭和20年3月に二高を卒業した後、4月に東京帝国大学医学部に進んだ。一方の楊威理は仙台に留まって東北帝大医学部に入った。葉氏は仙台を離れるその年の1月の日記で、東北での生活を述懐している。《東北は純朴。……東京に行きたい気がまた鈍い》《東京には行きたし、されど東北は去りがたし》また、その年の12月には以下のように記している。《この自然、野生は余の性格にぴったりする》《村の人々、東北弁、人々のしきたり、人々の気持ち、それらは最早自分の心の中に解け合っていて何らの奇異を感じない。……俺はもう相当に日本化され、日本人にされてしまった！生まれて以来、俺を取りまいたのは日本社会なのだ》。

著者の言うように、葉には二つの故郷がある。台湾が第一の故郷であり、東北が第二の故郷なのである。二人が台湾の同郷であることから楊氏の心境も察することができる。

「人間の心は、互いに矛盾した二つの感情を持ち合わせているようである。植民地の民はそれよりもっと複雑な感情の持ち主にさせられているのかも知れない。我々は日本の敗北を望んでおりながらも、長く共に暮らしてきた日本の人々と、そして長らく住み着いてきた日本の地とに無限の愛情を覚えている。葉は台湾人として、台湾に育ち、台湾の山川は夢路にしょっちゅう出てくる。さらに自分のルーツを探しては、中国にアイデンティティーを見出そうとして必死になる。」

葉氏は東大医学部で教練の中隊長に指名された。東京に行ってから楊氏とは文通を続けた。その後、一、二度仙台にも立ち寄ったことがあった。また東大精神科にいた台湾人の先輩林宗義と語って大いに感動した、と昭和20年7月18日の日記にこう記されている。

《人類を目標とした、民族のための医学以外に医学はない。それは独占、偏狭を伴わざるものである。……Wahrheit [真理] への愛、道義に生きる、これいかなる時と所に関わらず、我らの進む根本道であろう。漢文！勉強にこれ努めよ》

葉氏は東大でJOAK放送局（現NHK）に勤めていた曹欽源先生の福建語の講義や、魚返善雄先生の中国語の講義にも出席していた。6月8日の日記には《世界観的、純粹なる同胞愛に根差す夢は、あらゆる困難があっても、その実現に進む我々の責務であろうと思う》とあり、6月13日から、日記のところどころに簡単な中国語の字句が見られるようになった。ここで、著者は「彼の中国人意識はこの時期にますます高められていった。」と述べているが、筆者はこの中国人意識にも多少疑問に思うのである。葉氏のことでの中国意識は楊氏の言うような中国大陆ではなく、台湾が日本の植民地から開放され、これから中国化するふるさと台湾への愛着のことではなかったかと思うのである。前述のように当時の二人は中国と台湾に対する見方が異なっていた。楊氏は中国から台湾を見ていたのに対し、葉氏は台湾から中国を見ていたのではないだろうか。

6月3日の晩に、葉氏は親戚の葉秋源氏を訪ね、故郷のことや昔のことを語り感慨無量だった、と次のように日記に書いている。

《我がRace [人種、民族] の強い力を今更のように感ずる。望郷の情、切なるものあるも、自ら使命を感ずるまた深きものあり。現在の余にとりて、勉学、科学的知識の吸収は絶対に必要なり。あくまで責務を感ず。故郷を思い、葉家を思い、友中目兄を思い、中目兄のVater [父] の言に感じて、小生の決意ますます確たるものあるを感ず。確固として戦い抜く決意なり。自重すべきは自重し、熟慮、しかして断行は断たるべし》

7月30日の日記には《……中目兄を思うこと切なるものあり、夢にまで見て。夢に中目兄を見たるは、余の心に反省あり、また健全なるを思うと嬉しい》

日本敗戦の10日ほど前に葉氏は東北に疎開し、仙台の楊氏のところにも立ち寄っている。数日に亘って、二人は文通では語れない問題を討論した。この時の二人の討論は、恐らくその後のことも語ったのであろう。この時の二人の深夜までの討論を、著者は次のように述べている。

「中国国民党と中国共産党のイデオロギーの相違はどこにあるのか。いずれにしても、中国の戦後の飛躍を、我々二人は疑わなかった。日本帝国主義は破滅するであろう。戦

後、日本に革命は起きるであろうか。いずれにしても、我々は日本の滅亡と日本の植民地化を断じて望まなかった。徹夜に続く徹夜の討論で、昼間に横になることも多かった。」

この年の10月19日の葉氏の日記では《中国の前途、台湾の建設には幾多の困難があるう。しかしあくまで余は生氣のために進まん》と、この頃は楊氏も葉氏も中国と台湾の前途は茨の道と予測していたのである。

葉盛吉氏は1945年10月10日（双十節）に発足した「新生台湾建設研究会」に参加し、「中華民國旅日（在日）学生連盟」の渉外部員となり、1946年2月4日には推されて渉外部長になった。また同年の3月12日には台湾同郷会で「中華民國国籍」の登録をしている。この間、葉氏は中国語を猛勉強し、拙い中国語で日記を綴り始めた。

著書によると、1945年11月25日の葉氏の日記は中国語で書かれているが、著者は次のように日本語に訳している。《明治学院において、「漁光曲」を合唱、嬉しかりき。今や、日本の文化侵略に相対し、我が中国の歌を唱いて、祖国の文化に接するを得。また楽しからずや》「漁光曲」とは中国の有名な映画の主題歌である。さらに、その年の12月31日の日記では《八年の苦しい戦いをへて、祖国は今栄えある勝利に達した。我々はこの偉大なる努力の結晶が次の時代の飛躍力たるを信じて疑わない。》と述べている。

戦後間もなく、新聞でも一般世論でも、日本はアメリカには負けたが中国には負けていない、と書かれまた言われていた。一方、日本の指導者が戦争責任をどう認識しているかといった問題は、しばしば耳にしていたという。葉氏も楊氏もこの問題を重大視した。1945年11月18日と19日の葉氏の日記では、《中目先生来京。夜遅くまでだべり寝る。三つの問題について。1. 将来の進路（医学？それとも社会科学？）、2. 日本の指導者の中国に対する無反省、3. 我々の生活問題。……日本の指導者は特に中国に対して全然反省しておらぬ》と述べている。

1945年12月1日の日記では、《東京に出てから特にJ氏、劉氏と接して鍛えられた論理的な欠乏よりの自覚が、余をして論理的に現実的に物を見せしむ》と記されている。

実はこの頃、葉氏は東大医学部で1年先輩の劉沼光氏と知り合っている。劉氏は台湾出身で、新竹生まれの客家、一高のOBである。劉氏は後に帰台し、台湾大学に転校したが、そこで葉盛吉氏を中国共産党に引き入れたのである。つまり、劉氏は蒋介石の「赤狩り」で銃刑に処され、27歳で命を落とすことになった葉氏の運命を決定つけた人物であった。東京滞在中に、劉氏が思想面でどれほど葉氏に影響を与えたのか、日記には上記の一箇所だけにしか記述が見当たらない。

その頃、戦後の東京の庶民の食糧切迫の生活苦を目の当たりにして、葉氏は第二の故

郷の日本への愛着の心境を12月16日の日記で以下のように書いている。

《こんなに単純な、そして人のよい日本人を誰が一体こんな惨めな状態に陥し入れたの
 だろうか。日に日に奈落に沈み行く人々、かつての美しき大和島根とうたわれたこの日
 本が、こんな惨状に陥ったことに一掬の涙を注ぐは、単なるセンチメンタリズムではあ
 るまい。七千万の大和民族の墮落は、決して大東亜の建設にとって幸（福）ではあるま
 い。我らは日本人をして反省すべき点は反省せしめ、正すべき点は正し、中日関係の禍
 根を除くはもちろん、日本をその墮落より救わねばならぬ。我らは日本の帝国主義を打
 倒した。しかし、我らは日本の滅亡を断じて望まない》

葉氏は日本社会のどん底にある人たちにも接触しようとした。1946年1月23日の日記
 では「プロレタリア尾行」として書かれている。紙面の関係で内容は省略するが、中
 の一節に、《余は共産主義者ではない。だが、現実の問題を学問的、科学的に解決する道
 を進まねばならぬ》とある。少なくともこの頃の葉氏は左傾ではなかったのである。

5. 失望の帰台

戦後多くの台湾人学生は帰心矢のごとくであった。「大和魂を太平洋にぶち込んで一
 日も早く帰国しよう」。このような思いで、毎日故郷の空を仰いでいたという。しかし、
 著者の楊威理は他の学生と異なった見解を持っていた。「医学なんか止めてしまえ。帰
 国したら一番いい北京大学に入って、マルクスの言うがごとく、経済学を勉強しなくて
 は、現代社会は理解しかねる」と考えていた。あんな小さい島に戻って何になる、行き
 先は北京だ、と意を決していたという。楊氏は中国大陸の北京大学に行くことを決意し
 たが、一方の葉氏は、台湾か中国大陸かアメリカかで相当迷っていた。1945年12月26日
 の日記では、《余、中目氏の帰台を聞いて大いに帰りたくなる。アメリカにも行きたい。
 しかし、余はまず以て中国学生らしくになりたい。今の余は、及び中目氏にとって一大な
 る問題は実に医学に進むか、経済に進むか、もしくは他の学科に進むか？医学に一生打
 ち込むファイトはない！しかし、手段として医学を修めよう。台北に行くことにす》と
 ある。

さらに、1945年12月30日の日記に《近く俺を迎えんとする新しい生活はそも何ぞ。父
 母との対面、Heiraten [結婚]！ 台北大、中国行き、中国語の熟達、アメリカ行き
 などなど……Romanticistたるべき》。1946年の2月15日には、《世界を知らねばならぬ。
 大陸へ行くぞ！！》とも書いている。

1946年2月、楊氏は東北帝大医学部を中退して北京に直行するつもりであったが、大陸に行く船がなく、ひとまず台湾に帰り、そこから大陸に行くコースを選んだという。楊氏の帰国の意図を知った葉氏もまた台湾に帰ることにした。

1946年2月10日に楊氏は上野の西郷隆盛の銅像の下で葉氏と会い、葉氏は東京駅のプラットフォームで帰台の楊氏を見送った。楊氏は横須賀港から名残惜しさに一人で船の甲板から感慨にふけり台湾に帰国したのであった。日本を離れる時の心境を楊氏は次のように書いている。

「二十年以上も全体主義に荒らされたこの国ではあるが、人は皆いい人だ。何とんでも、ここは私の青春をはぐくんでくれた国だ。そして日本人の身振りで過ごした国だ。愛情は政治にはためにならぬというむごい考えで、私は初恋の人をここに残して、今や永別しようとしている。祖国中国への希望にあふれていた私ではあるが、やはり日本を去るのは悲しかった。」楊氏が日本に戻って定住したのは43年の後、天安門事件後の1989年12月26日であった。

葉氏は楊氏の少し後に、1946年4月2日に呉から出港して台湾に帰国した。日本を離れる前の1月2日に葉氏は日記にこう書いている。

《[日本は] 思想確立の故郷として永く余の心に残るであろう。余はromanticistなり。故に私は多くの美しい夢、思い出を残して日本を去ることができるような気がする》
また、出帆の日に葉氏は中国語でこう書いている。

《正午、出帆。日本の可憐の山河！！再見！！離別日本の感情很不能写在紙上》

二人は愛しんだ日本を離れ、理想と大望を抱いて、故郷の台湾に帰国した。ところが、彼らを待っていたのは彼らが想像していた台湾ではなかった。

1946年4月8日、葉盛吉氏は5年ぶりに懐かしい故郷の台湾に帰ってきた。基隆港に着いた第一印象を《埠頭にいる国軍[国民党の兵隊]は実力なし。幻滅的悲哀を感ず》(原文は中国語)と日記に書いている。

当時の台湾の様子は楊氏の著書では以下のように書かれている「日本は戦争に敗れて、五十年も統治していた台湾を中国に返した。台湾人は中国への復帰を心から喜んだ。あたかも虐待された里子が実家に戻ったがごとくに。一九四五年十月、台湾人は大陸から来た中国政府の官吏とその軍隊を迎えた。その歓声の声は空に轟きわたるほどであった。ところが、蒋介石政府が台湾に送ってきた軍隊はみすぼらしく、軍紀も悪かった。

大陸から来た国民党の官僚は腐敗の極みを尽くし、日本が残した財産物資を「接収」して自分の懐に入れるに暇がなかった。同じ中国人でありながら、大陸から来た、いわゆる「外省人」は、あたかも征服者のごとく振る舞い、「本省人」の台湾人を虫けらのように取り扱った。要所のポストはほとんど外省人に占められてしまった。物価はうなぎ登りに上がり、生活は日に日に苦しくなっていた。」一方の葉氏は1948年1月10日の日記で当時の台湾社会をこう批評している。《社会は退廃とサボタージュ。貪汚と姦淫。Alkoholismus [アル中] に豚」「貪汚」とは汚職のこと、「豚」とは外省人にたいする蔑称で、「豚」が台湾に溢れていることを指す。

台湾に帰国後、葉氏と楊氏は共に台湾大学（元の台北帝国大学）の医学部に転入した。楊氏は大陸行きに奔走し、まともに医学を学ぶ気になれなかった。さらに楊氏の父親は終戦後、旧満州で消息不明になり、親からの仕送りは全く絶えてしまった。葉氏は親から送金してもらったが、それもわずかなものだったので、生活を乗り越えるため、いろいろなアルバイトをせざるを得なかった。帰台して1ヶ月もたない5月7日、二人は台北開南商工学校（旧制中等職業学校）の校長を訪れ、代用教員として雇用してもらった。当時二人は台湾大学医学部での授業中に、教室の後ろの窓から逃げ出して開南商工に行く日が続いた。ところが、アイスクリーム一個が10元に暴騰したのに、中学教員の時間給は15円で何の足しにもならなかったことから、今度は二人で露店を開いてシャツを売ることにした。同じく日本帰りの台湾大学医学部の一年上の胡秀山氏の父親がシャツの縫製工場を開いていたので、シャツを分けてもらったという。

台湾の庶民には、生活苦のほかに、国民党の政治に対する不満も漲っていた。《何もかも思う通りにならぬ。結婚問題、生活問題、社会現状、すべて難題なり》（日記、1946年7月24日、原文は中国語）

結婚問題とは、葉氏が東京新宿の伊勢丹で知り合った女性とのこと。同じ船で帰台し、その後も約3年間交際が続いた。親の反対により、ついに実らぬ恋となったという。1945年9月3日、重慶で行われた戦勝式典の1周年記念日に葉氏はこう書いている。《台湾は一体どんな所なのであろうか。勝戦と言っているが本当なのだろうか。台湾は勝利の喜びを享受しているのだろうか》（日記、1946年9月3日、原文は中国語）

二人が転入した台湾大学は、葉氏の言によれば、《一番悪い、最も非民主的な大学になり変わっている》（日記、1946年10月23日、原文は中国語）。なぜなら、楊氏の解説によると、多くの日本人教授は帰国し、授業のレベルは低下する一方であったという。

葉氏は帰台して10日しかたっていないのに、既に帰国を悔やみ始めた。生活、社会、

政治、大学、異性などの問題が、すべて自分の意にならないので、台湾に帰ってきたことを後悔したという。

《理想は達せられず、人生はことごとく錯綜し、万事不順、心晴れず。東京より帰りしことを後悔す》（日記、1946年4月19日、原文は中国語）

その頃、葉氏は姉がマニラから台湾に戻っていたので、マニラに行くことも考えた。アメリカ行きも考慮した。東京に戻ることも頭に浮かんだ。楊氏のように中国大陆にも是非行きたいと思っていたという。5月24日の日記には以下の事項が並んでいる。

《東京、北京、マニラ、医学、語学、Liebe [恋愛]、Health [健康]》

葉氏の台湾から離れたいという思いは、帰台後1年近く続いた。著者は、葉氏には優柔不断の一面があった、もし彼がこの時点で躊躇せずに離台しておれば、その後の人生行路は大いに変わっていたろうし、若い命をこの島で落とす悲劇は起こらなかったに違いない、と述べている。葉氏はまた、理科から文科に転向しようと相当迷ったが、医学を捨てる決心はつかなかった。文科の勉強をしなくてはと、彼は台北の延平学院（台湾が中国へ復帰した後、台湾有志によって創設された夜間単科大学）で社会科学の講義を聴講し始めたという。

一方の楊氏は北京留学の官費生のチャンスをつかみ、念願の北京大学経済学部に入ることになった。志願書には第一志願から第三志願まで、すべて北京大学としたのであった。1946年12月5日に楊氏は北京に向け出発した。葉氏は日記にこう書いている。

《今日の正午に、楊君が基隆から発つ。九時半、医学部の細菌学教室で別れる。彼は黒い冬着の中山服 [人民服] を着ていた。小雨が降っていた。彼に英文の履歴書を持っていってもらった、私も北京に行きたいので。彼とはこれで二度目の離別だ。一回目は東京駅のプラットホームだった》（日記、1946年12月5日、原文は中国語）

1948年7月の夏休みに楊氏が北京から台北に帰省し、2年ぶりに葉氏と再会した。その日の別れの晩に葉氏が言った一言を、楊氏は一生忘れられないという。「正しい道を俺は死を賭しても歩き続けるよ」。

1948年の9月1日から25日まで、葉氏や胡秀山氏など医学部の学生5人は、大陸の大学医学部の視察と医学部研究者との交流を目的に、上海、杭州、南京、蘇州を訪問した。葉氏が中国大陆の地を踏むのはこの時が初めてであった。基隆港から船出するときの気持ちを《異国に行くような感じ》（内地旅行記）と彼は書いている。

胡秀山氏は前出の父親がシャツの縫製工場を開いた友人で、同じく日本帰りで一高、

熊本医大に学んだ台湾大学医学部の1年上で、葉氏と楊氏共に生涯の親友であった。楊氏の著書には胡氏のことにも述べられている。胡氏は1990年に亡くなったが、楊氏が台湾に帰れなかったその後の40数年間、兄貴分として楊氏の妹の面倒を見ていた。楊氏の妹の進学、求職、生活等ありとあらゆる問題で相談に乗り、また援助もしたという。上記の通り、1989年の天安門事件の後に楊氏は北京から暫時イギリスに移ったが、当時アメリカで治療を受けていた重篤の胡氏は何度もロンドンに国際電話を掛けて、楊氏の安否を気遣い、生活を心配し、イギリスに大金を送ってくれたという。

6. 思想の左傾・赤狩り・銃刑

著者が言うように、人間は絶対的な境地に追いやられると、思想が過激化するのとは仕方がないことなのであろうか。終戦の日本でも同じように、過激思想が一時頭をもたげていた。帰台後の葉氏の思想がどのように左傾したか、著者は日記では読み取ることができない。二高時代に丹念に書いていた「手記」は、台湾に帰ってからはメモ帳のようなものになっている。それは、独裁政権のもとでは、その種のものを書くのは避ける方が良いとの考えに基づいたと解される。

葉氏は台湾大学に入ってから、二高時代と同じく、台湾大学の学生自治会の各方面で活躍した。台湾大学の全校の学生自治連合会の理事、医学部の学生自治会の常務理事、クラスの代表、学生寮の幹事など多くの任務を受け負った。彼の多忙ぶりは、卒業の年の1949年3月2日の日記に《組、自治会、寮のことが錯綜して疲れる》と書かれていることから分かる。葉氏の人格と才気は台湾大学で広く認められていた。「葉盛吉以前に葉盛吉なし。葉盛吉以後にも葉盛吉は出てこないであろう」と。葉氏の台湾大学の同窓生の林丕煌氏は葉氏のことを上記のように言っていた。

当時の中国では、どの大学でも学生自治会は左翼の学生によって握られていた。中共は学生自治会を通じて学生運動をコントロールしていたのである。葉氏は自治会で多くのその種の左翼学生と接触していた。

1948年頃から、共産党の人民解放軍は大陸の大都市を北から次々と占領し、国民党軍の崩壊は間近に見えてきた。このような情勢の下でインテリ層が中国の共産党に傾いていったのはごく自然な成り行きであった。葉氏も例外ではなかった。当時の台湾のインテリと学生の多くは「2・28事件」に参加した。

「2・28事件」は1947年2月28日に台湾で起きた民衆による反国民党暴動事件である。日本の敗戦後、台湾の統治者となった中国から来た国民党政府は武力で台湾人に対して

暴政を欲しいままにした。1947年2月27日に起きた台北市内でのヤミタバコ取り締まりをめぐる民衆と専売局職員との衝突において、タバコ売りの老婆が殴打されたのをきっかけに、積もりに積もっていた民衆の怒りが爆発し、翌2月28日には台北から台湾全土に広まった。民衆のデモ隊は軍隊の発砲を受け、この暴動は最終的に国民党政府の軍隊によって鎮圧されることになったが、2万人以上の台湾人が犠牲になった。にもかかわらず事件の実状は公表もされず、以後40年もの長期にわたり戒厳令が布かれ、この事件はタブーとなった。1992年の李登輝政権になって初めて、公式に2・28事件の犠牲者の慰霊祭が行われた。2・28事件は外省人と本省人の対立を生むことになった。この事件以後、インテリ層と学生の国民党に対する激憤は自然と共産党に寄りかかっていったのである。葉盛吉氏は直接この事件に関与していないが、この事件が葉氏に与えた思想上の影響は大きく、国民党反対の態度は彼の中で決定的なものになったと思われる。この間の1ヶ月ほど、1日わずか数行のメモの形で日記に生々しく記録された。

《ついに来たるべき日は来た。記念すべき日なるかな！夜八時より、戒厳令布かる》（2月28日）

《一日中、雨で外へ出られぬ。夜中、銃声猛々し》（3月8日）

《今日より再び戒厳令布かれ、一日中銃声ものすごく、外へ出られぬ。》（3月9日）

《やはり戒厳令。少しは人も歩くようになった。朝、兎玉町へ出てみる。店のガラス壊れ、路上に死体あり。午後、飛行機ビラをまく》（3月11日）

《午後、Wさんと城内に行く。B [外省人] のみ歩いていて、若い人はあまり見当たらぬ。死体目に付く。》（3月12日）

《なおまだ戒厳令。道行く人は山ばかり》（Bはドイツ語Berg [山] のイニシャル、山とは外省人に対する蔑称）（3月13日）

葉が共産党の地下組織に参加したのは、銃刑の判決書では1948年の9月となっている。

台湾大学医学部の共産党の細胞は最初は4人で、責任者は前述の劉沼光氏であった。劉氏は東大で葉氏の一年先輩で、思想方面で葉氏に影響を与えていた。葉氏の共産党の入党は劉氏の大きな働き掛けがあったのは確かであると著者は言う。なお、劉氏は1949年の8月下旬に中国大陆に逃れた。

楊氏の著書によると、中国共産党は台湾に中共台湾省工作委員会を作り、その責任者が蔡孝乾氏（蔡乾、または蔡前）であった。中共の台湾での組織は1947年の2・28事件の時は、わずか七、八十名の党員しかいなかったが、2・28事件後、3年で九百数十名

に膨れ上がった。これらの党員は百近くの地下組織を作り、そのうちの一つが学生工作委員会で、主に各大学で地下工作をしていた。葉氏は共産党の最末端組織の責任者であったという。葉氏が一体どんな活動をしたのか、勿論、日記には何も書かれていない。著者の推測によると、恐らく葉は学生自治会の公開活動を通じて、周りの学生に働きかけたのであろう。これらの活動は学生たちの政治意欲を煽ったため、国民党政府に恐怖感を与えていたに違いない。著者の言うように葉氏は自分の活動が台湾の民主化運動に一役買うことができると確信していたのである。それ故に、前述の1948年の夏休みに、彼は楊氏に「正しい道を俺は死を賭しても歩き続けるよ」と言ったのであった。

葉氏は1949年6月に台湾大学を卒業している。卒業論文のテーマは「Psychiatric Approach to Nietzsche (ニーチェに対する精神医学的考察)」で、サマリーを中国語で書いているが、本文は日本語である。論文の結論はこうである。《ニーチェの作品の全体を通じて流れる高い調子、暗示的内容、奇妙な表現法などの跳躍的性格は、やはり病気の問題を考慮しなくては理解できない》。卒業後、台湾大学付属病院第一内科に無給で半年間勤務した後、高雄の鳳山に1ヶ月軍医で徴用され、また、台湾大学付属病院に戻って有給の職を与えられた。しかし、葉氏は臨床医よりも医学の研究がしたかったので、そのポストを友人に譲り、台南の南にある屏東県の潮州のマラリア研究所に行ったのである。

台湾大学医学部を卒業後、翌月の7月27日に台南の郭淑姿さんと婚約、その年の12月24日に結婚した。郭淑姿さんの兄・郭朝三氏は葉氏とは台南一中の同窓で、中学卒業後二人は一緒に東京で2年間の浪人時代を送っている。郭朝三氏は旧制一高の受験に失敗し、のち海軍に入り、昭和19年サイパン島で戦死した。

1949年12月8日に国民党政府は台北に遷都し、蒋介石は12月10日に重慶から台北に逃れた。中国大陸を制圧した共産党軍は1950年、1年以内に渡海して台湾を解放すると宣言し、着々と作戦準備を整えていった。一方、台湾に逃れた国民党はこの島を反共と「反攻大陸」(失地回復)の根拠地にしようとして、いろいろな手を打っていた。そのうちの一つが「赤狩り」、即ち、島内の共産党の地下組織の撲滅であったという。

さらに1950年5月13日、台湾の国防部総政治部主任・蒋介石の長子の蔣経国は中国共産党の地下組織80余箇所を摘発し、中共台湾省工作委員会の最高責任者・蔡孝乾らを逮捕したと発表した。その蔣経国は若い時にソ連に留学し同国で共産党員であったが、台湾では共産党弾圧の総指揮者になった。

一方、中国共産党の内務部長と中共中央委員にまでなっていた蔡孝乾は逮捕された後、間もなく寝返りを打った。強要されたのであろうが、国民党の手助けをし「赤狩り」に

一役買ったと言われている。蔡氏は1950年1月29日に逮捕された後、台湾にある共産党の地下組織について明らかにした。5月31日の晩にはラジオを通じて台湾本島と大陸全土に向けて「反共声明」が発表された。

共産党員の大量逮捕のニュースを葉氏は5月14日に潮州のマラリア研究所で知り、急ぎ台北に戻った。5月16日の日記には《Dr.Yen[顔世鴻氏]に会って、big newsをきく。General Hospital[台湾大学の付属病院]が魔の殿堂のように見えた》と書かれている。

その理由は、3日前に既に付属病院の第三内科主任・許強氏と眼科主任・胡鑫麟氏が、また5月2日には外科の助手・郭琇琮氏などが逮捕されていたからである。彼らはみな地下の共産党員で、葉氏の恩師と先輩であった。潮州に帰る前に、葉氏は台南で久しぶりに妻と会ったが、これが最後の対面と彼は予感した。この時は新婚5ヶ月で、彼の唯一の子種は妻の体内に宿されていた。そして、それから一週間後の5月29日の午後4時に、葉氏は潮州のマラリア研究所で逮捕された。同年10月2日に彼の義妹が監獄に赤い卵の差し入れを持ってきた。葉氏は男児が生まれたのだとすぐに理解した。台湾では、男の子の誕生には赤く染めた卵でお祝いするのが習慣である。

5月16日の日記に出てきた顔世鴻氏は葉氏の台湾大学医学部2年下の後輩で、1950年1月に葉氏の紹介で共産党に入党した。顔氏は英、独、仏、日、中、ラテン、ギリシャの7ヶ国語を学び、中国の古典に対する造詣も深く博学多識のヒューマニストであった。文才に長け、医学部で異彩を放っていた人物である。葉氏とはほぼ同時に逮捕されたが、懲役12年の判決を言い渡されて生き残った。顔氏は1982年に中国語で約3万字の獄中での回顧録を書いたが、1988年にはこれを「霜降」というタイトルで約16万8千字に加筆改稿した。この稿の最初に「S.Y.に捧ぐ」という献辞が載せられている。「S.Y.」とはもちろん葉盛吉氏のイニシャルである。顔氏はその原稿を本にして出版するつもりはなかったので、「『葉盛吉伝』の著述に十分利用できれば」と楊氏にコピーを送ってきた。楊氏は、葉氏の日記が日本での留学時代には丹念に書かれているのに対し、帰台後はメモ形式になってしまったため、顔氏はその原稿は大変有難かったという。

顔氏の回顧録「霜降」では、彼が知り得た幾人かの臨終の姿が描かれている。大量銃殺は9月30日から始まった。その日は、謝瑞仁医師、蔡国礼医師、張木火教員が処刑された。翌10月1日は、大陸の中華人民共和国の建国記念日である。この日に処刑された9人は台湾新竹出身の江徳興博士のほか、みな大陸出身者である。その中には国民党の郭秉衡少佐、劉全礼参謀少尉が含まれていた。彼らは国民党員でありながら共産党の地下組織に参加していた。10月14日には基隆中学校の校長鍾浩東氏が銃殺された。鍾氏は台北高校と明治大学に学んだ人格者で知名人でもあった。日本統治時代に大陸に渡って、

反日のゲリラ戦に参加した。共産党に入ったのは、日本敗戦の翌年で、台湾ではベテランの革命家であった。同時に処刑されたのは基隆市工作委員会委員の李蒼降氏と基隆郊外の汐止支部書記の唐志堂氏である。

軍法処での開廷は9月3日のただの一回であった。一人が約2、30分の短時間、それも北京語と閩南語の通訳部分を含めてである。この日に葉氏は顔世鴻氏と廊下ですれ違った。「一切合切、僕のせいにしてくれ」と彼は顔氏に囁いた。そして、葉氏ら「学委案」の死刑囚は11月29日に銃殺された。40数名の犯人の中で、死刑を宣告された者は11名、懲役15年は7名、懲役12年は顔氏を含めて6名、懲役10年は14名、懲役8年は1名などとなっている。葉氏の罪状は中国語でたったの3行で、日本語に訳すところなる。「被告は既に逃亡した共産党学生工作委員会委員劉沼光の紹介で、1948年9月に入党、台湾大学医学部の細胞の責任者となる。1950年2月、顔世鴻を入党させ、この細胞を再建し指導した、1950年3月、台湾大学を離れた後は活動なし」

判決書も葉氏は台湾大学を離れた後は活動なしと認めている。それなのに死刑とは！台湾のエリート、愛国者、台湾民主化運動の活動家、日本を第二の故郷と見なしていた葉盛吉氏はかくして27の春秋を終えた。1950年11月29日黎明6時のことである。処刑場は台湾大学付近の水源地の川端で、日本統治時代は馬場町と呼ばれていたところであった。蘇東坡が「大江東に去り、浪は淘（あら）い尽くせり、千古風流の人物を」（赤壁懷古）と詠んだのが、正にこれである。

7. 獄中で書いた遺書

処刑される1ヶ月前の10月24日から27日にかけて、葉氏は「Autobiography 自叙伝」を日本語で書いていた。2万字に近い美しい日本語で5年前まで日本にいた二高での留学生生活を回想して、終戦までのことが書かれている。彼は死を予期していたのであろう。結婚1年にも満たぬ若き妻に、そして永遠に見ることのできない我が子に自分の短い一生を書き残しておきたかった。「自叙伝」の最後に《忍苦の淑姿及びまだ見ぬ可愛い光毅に父はこれを送る》と記し、署名はローマ字でS.Yehと綴っている。

葉氏は自叙伝を何故日本語で書いたのか、顔世鴻氏は回顧録「霜降」でこう回想している。

「十月二十四日、この日は韓国の第六師団が、雪山で中共部隊の待ち伏せ攻撃を受けた日である。葉さんはこの日に第二十七号獄室で自叙伝を書き始めた。彼は奥さんが男の子を生んだことを、既に知っていた。ところが、こと自分の生か死かについては、彼

自身は判断もできない。生の機会を見逃す人は一人もいない。が、客観情勢はだんだん自分に楽観を許さないものがあるように見える。たとえ、この自伝を書き残しても、この子の手元に届くか、これも予測は出来ない。それで、彼は慎重に微妙な問題を書くことを避けた。自叙伝は遺書と見なすこともできよう。が、そうだとすると、自分の志を述べることを避けることは出来ない。してまた、字句の使い方にも気をつけないと、軍事裁判官の怒りに触れることもあろう。自叙伝は日本語で書き始められた。」

楊氏の著書では、「自叙伝」は日本統治時代については相当客観的に書かれているという。但し、日本から台湾に帰った後の事は書かれていない。顔氏の言うようにこの時期は微妙な問題ばかりである。葉氏は次のような一句でこの「自叙伝」を結んだ。

《日本の敗戦と中国の勝利、そして台湾の光復[中国への復帰]は、我々に主観的にも、客観的にも非常に深刻な影響を与え、それは今日もまだ継続中である》

著者の言うように、葉氏の「自叙伝」は日本の教育を受けた台湾の一知識人が死の直前に日本語で書き残した貴重な記録である。また、葉氏は銃刑される2週間前の11月12日に愛児光毅宛に父性愛溢れる手紙を書いていた。

《可愛い光ちゃん

君の写真をみて、お父さんはとても喜びましたよ。あの晩、お父さんは眠れなかったのよ。光ちゃんの大きな体、目、鼻、口、何から何まで、お父さんに似ているとか。本当に嬉しいなあ。…………大きくなったらよく勉強して医学をやりなさいね。…………お母さんの胸に抱かれて泣かないですやすやと寝てね…………》(1950年11月12日、原文は中国語)文末に自ら書いた素晴らしい漫画が付けられている。男の子の好む漫画で、びっくり箱から人形が飛び出ているものであった。

この手紙は葉氏が銃殺された時にネクタイと一緒に自分の体に縛り付けられていたそうである。遺児の光毅氏はこの手紙を父親の遺書と見なしているという。手紙は、楊氏の著書では上記のようにカタカナの幼児語の日本語で訳されているが、実際の中国語の原文は、父親のいないわが子の将来を心配し、成長するわが子への父からの遺言である。父性愛に溢れ、涙なしには読めない感動的な手紙である。内容はキリスト教色が強いが、これは葉氏が獄中でキリスト教を信仰し始めたのではなく、クリスチャンである妻とその家族への思いやりの気持ちの表れである。著書に掲載されている現物の手紙の写しを、中国語の原文のまま以下に記す。

〔第五信〕

天真可愛的光毅兒…

見了你的照片, 我的心中不知道怎樣高興。

在當天的夜裏我睡不着,

我不信, 毅兒, 大漢, 眼睛, 鼻子, 嘴都像我嗎?

我很幸奮。

我們雖然是沒有見過面, 我們雖然是生活在兩個世界裡,

但是我為了你, 已在這不自由的鐵窗裡得到了愛和希望,

已在這黑暗的牢獄裡得到了曙光和信仰。

我盼望你今後

不斷的給我送來愛, 望, 光和信!

祇有你可以造成我和自由世界的橋梁!

毅兒! 你聽爸爸的盼望,

要努力用功進到醫學吧!

那門一開, 在你眼前展開的光燦就一定眩惑你,

那裡的寶貝, 不但給你喜歡,

而且把希望給整個人類!

你不要感覺寂寞,

醫學史上的先師就是你的老師。

他們一定引導你, 安慰你, 把不撓的勇氣來給你,

他們結的把成果照光了路, 你要繼續跟走。

毅兒! 你聽! 媽々の搖籃歌, 乖々在你媽懷裡睡吧!

你的爸々每天在禱告上帝保佑你們的康樂!

民國39年11月12日

父 葉盛吉 畫 (びっくり箱の漫画付け)

死刑の2日前に書いたこの手紙で、葉氏は愛児光毅にクリスマスのプレゼントに何が欲しいか、と聞いている。

《光ちゃん、クリスマスのプレゼントは何が欲しいの? お父ちゃんに教えて頂戴。台北のおばちゃんにお願いして台南まで持って行ってあげるからね》(11月27日、原文は中国語)

しかし、葉氏はついに自分の子を一目見ることもなくこの世を去った。

終わりに

楊氏は著書で、「赤狩り」の3、4年間で殺されたのは、およそ4、5千人、無期監禁と有期監禁は8千人から1万人と書いている。この小さな島にとっては莫大な数字である。その中には葉盛吉氏のような英才が多数含まれていたのである。国民党と共産党はこの数十年、中国大陸で血なまぐさい闘争を続けてきた。1949年12月に大陸から追い出された国民党は、この闘争の舞台を台湾に移した。葉氏はこの血の闘争の犠牲者となったのである。

本書の執筆は、楊氏が1990年にご息女のいるロンドンに一時滞在していた時に、台北のご実弟に頼み葉光毅氏の情報を探し出したことがきっかけである。弟氏は台南新営駅の近くに慈善病院を開業している顔世鴻氏を探し出し、ようやく台南の国立成功大学で教授をしている葉光毅氏の話が分かった。葉光毅氏にとっても、父親の日記によく登場する親友の中目氏をやっと見つけたのであった。著者が来日後の1991年の3月には、葉光毅氏が分類していた父親の25冊の資料のコピーを東京に送ってきた。著者は2年の時間をかけてその資料を読み、1993年に本書を出版したのである。

上記のように、楊氏もまた主人公の葉盛吉氏とは違った波瀾万丈の人生を歩んできた。本書を出版した1年後の1994年に著者は日本国籍を取得した。同年、彼は1948年夏の離台以来、約半世紀に近い46年ぶりに台湾に帰省した。楊氏は43年間北京に住んでいたため、標準的北京弁の中国語を話す。楊氏は筆者と同じ台湾同郷人であり、大学では、公務以外は互いに方言の閩南語（いわゆる台湾語）でいつも会話をしてきた。前出の顔世鴻氏と同様、楊氏も7カ国語、すなわち、英語、仏語、独語、露語、日本語、中国語、台湾語を駆使する語学にも秀でたインテリゲンチアである。筆者は以前、中目先生の楊氏を7か国語の天才ですねと褒めたことがある。それに対し楊氏はニコニコ笑いながら「いいえ、7カ国語ではなく、8カ国語ですよ」と。もう一つは何？と聞いたところ、「豚語です」と。なんと文化大革命の時に農村に下放され、豚の飼育主を担当していたというのである。楊氏はこのようなユーモラスな一面もお持ちである。台湾では植民地時代の日本人を「犬」と喩え、戦後の中国人を「豚」と罵った。本著の『ある台湾知識人の悲劇』は楊氏帰日の1993年以後の最初の著書であるが、1994年には2冊目の『豚と対話のできたころ』を出版している。中国の文革から天安門事件までの状況を描いた本である。楊氏は中国では24歳から64歳で退職するまで、北京中央編訳局図書館長という肩書で40年間「万年館長」を勤めていた。なお、楊氏は同時に蔡元培研究の大家でもある。

筆者は台湾で戦後の蒋介石国民党政権時に生まれた世代であり、小学校から大学まで、

蒋介石・蔣経国親子二代の国民党政権時代を経験してきた。当時は戒厳令が布かれていた所謂一党独裁政権時代であった。戒厳令は2・28事件の1947年から李登輝政権の民主化運動の1987年まで40年間に亘って続き、その後ようやく解除された。その間、台湾と中国大陸の行き来ができなくなり、楊氏のように故郷台湾に戻る事の出来ない人達が大勢いた。言論や出版の自由がなく、出入国の審査が厳しくて簡単に海外にも行けない時代であった。その頃は誰も国を批判することが出来なかった。台湾語、台湾の歴史、台湾の文学など、台湾に関する研究を行う者は悉く台湾独立派と思われ、思想犯と見なされることもあったので、誰もがそれを忌避し恐れた。

当時、2・28事件は禁忌の名詞であり内容がよく分からなかったが、親に聞いても教えてくれなかったため、タブーな事件と考えていた。学校ではすべて中国大陸のものを勉強させられ、中国の歴史、地理、文学が中心であり、50年間の日本の植民地の歴史や台湾の歴史については一切教えられることはなかった。植民地時代の台湾の国語は日本語であったが、蒋介石政権からは突如、北京語に変わったのである。徹底的な北京語教育で、学校では方言の閩南語(台湾語)を話すと罰金が課された。因みに筆者の子供の頃、母親から教わった童謡は日本語のそれであった。母親は北京語の童謡を知らなかったからである。学校のいたる教室や官公庁の事務室でも、その前部には必ず建国の父・孫文の肖像が掲げられ、後ろには蒋介石の肖像があった。街にはいたるところに蒋介石の銅像が立っていた。当時、筆者はそれを当たり前の光景だと思っていた。実際、小学校の頃に「私の尊敬する人」という作文では蒋介石のことを書いたのである。何故なら、蒋介石のことを書けば良い点数が取れたからである。その時の筆者は建国の父・孫文を尊敬し、勿論、蒋介石をも尊敬していた。

そのような筆者であったので、本書を読んで大変なショックを受けた。まるで小説やドラマのような出来事が実話なのである。筆者の世代の人は誰も著者の楊氏の送ってきた波乱万丈の人生を知る術もなかった。葉氏のように、あの時代の台湾の前途有為の知識人が何故に若くして命を落とさなければならなかったのか。二度とあのような歴史は繰り返してはならないと切に願うのである。

台湾は民主化運動を経て、近年大きく変わってきている。言論と出版が自由となった。そして、本書は小説家の陳映真氏により『双郷記』というタイトルで中国語にも翻訳されている。この種の本が世に出るとは蒋介石政権の時代には全く考えられなかったことである。このような本が歴史の中に埋もれてしまっただけでなく葉盛吉氏の犠牲は報われない。その意味でも、中目先生の本著、及び葉氏の「自叙伝」や日記、手記などは、戦中・戦後の台湾の歴史研究において極めて貴重な資料である。

謝辞：本稿では、中目先生のご了解により、そのご著書から多くを引用させて頂きました。また本稿の完成にあたり先生から種々アドバイスも頂戴しました。中目先生のご指導に対し、ここに記して御礼申し上げます。

〈主要参考文献〉

楊威理『ある台湾知識人の悲劇』（岩波書店、同時代ライブラリー137、1993年2月）

中目威博「二つの故郷 ある台湾知識人の悲劇」（『世界』第565号、岩波書店、1992年3月）